2月1日(午後)

2025年度

国　　語

最初に、以下の注意事項をよく読んでください。

1．問題冊子は監督者の指示があるまでは開いてはいけません。

2．監督者の指示にしたがって、解答用紙に**受験番号**と**氏名**を記入してください。問題冊子は**受験番号**のみを記入してください。

3．試験問題の内容に関する質問には答えられません。それ以外の用事があるときは手をあげてください。

4．受験中気分が悪くなったときは、監督者に申し出てください。

5．漢字で書くべきところは漢字で書いてください。

受験番号	

＊ 解答に字数制限がある場合は、句読点なども字数として数えます。

【一】 次のそれぞれの問いに答えなさい。

問一 ①～⑥の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

① 室内をアタタめる。　② 味方のセイリョクを広げる。　③ スポーツは得意なリョウイキだ。

④ リンジで会議を開く。　⑤ 学問をツイキュウする。　⑥ 彼女（かのじょ）にホチョウを合わせる。

問二 次の中から意味が似ている言葉を二つ選び、記号で答えなさい。

ア、案外　イ、外来　ウ、意外　エ、外野　オ、屋外

問三 次の□の中のひらがなを漢字にしたときの部首名をひらがなで答えなさい。

先［ぞ］代々受け継（つ）ぐ。

問四 次の□に対（つい）になる漢字を入れて、四字熟語を完成させなさい。

□耕□読

問五 次の文はことわざである。（　　）に入る漢字の総画数を漢数字で答えなさい。

（　　）に短し　たすきに長し

【二】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

レッスンの後は、いつも心地よくからだがだるい。行きの電車の中では、たいてい小春も私もはしゃいでいるけれど、帰りは［1］寡黙になってしまう。ホームで電車を待っている間も、新しく覚えたばかりのステップを試してみたり、頭の中でエンドレスに鳴り響くダンスのＢＧＭをときおり口ずさんだりはしても、私たちはあまり喋らない。からだの芯が火照っている感じがじわじわと末端に広がって、全身がほかほかと温まってゆく、そんな疲労感に黙って身を任せる。その日も小春は電車の手摺に頭をもたせかけ、［2］放心しているように見えた。再び奇妙なモードで例のインドの歌を歌いだすこともなかった。私は窓の外の移りゆく景色を［3］眺めて、お腹が空いたなあ、今日の夕食は何だろう、などと呑気に考えるでもなく考えていた。前の晩に父のようすが変だったことやインド行きの謎については、気持ちよく汗を流して踊りまくった後では、もはやどうでもよくなっていた――というか、ほとんど忘れてしまっていた。

そんなだったから、帰宅して玄関のドアを開けたところで、父と母の言い合う声が耳に飛びこんできたときには、不意打ちを食らった気がした。①ふたりは、おそらく、喧嘩に夢中で、私たちが帰ってきたことにも気がつかなかったのだろう。遠慮のない大きな声で言いたい放題でやり合っている感じだった。それも、喧嘩のテーマは、どうやら小春と私のことらしかった。俺がいなくなったら、さっそくあの子たちを芸人にするつもりなんじゃないか、と言う父の声が聞こえてきたのだ。それに答えて、母は言った。

「そうね。そうかもしれない。あなたは反対ばかりしてるけど、私はあの子たちにやりたいことをやらせてあげたい気もしてるもの」

すると、父は更に声を荒げて、

「おまえはミーハー[注1]なんだよ。ステージママ[注2]なんてみっともないと思わないか。子どもに夢を押しつけてるんだな。それじゃあ、子どもが可哀想だ。親にいいように利用されてるんだからな」

でも、母も負けてはいなかった。

「あら。夢を押しつけてるのは、あなたの方じゃないの？　それも、ちっぽけで平凡な夢をね。でも、もしかしたら、あの子たちは、あなたのせせこましい夢の中に納まるような器じゃないのかもしれない。能力のある人間は、その能力をちゃんと伸ばさなければ不幸になってしまうって、私の高校のときの先生が言ってたものだけど……」

「おまえの高校のときの先生なんて、俺は知らないよ」

「そりゃあ知らないでしょうよ。でも、すごくいい先生だったのよ」

小春と私は玄関先に佇んだまま、顔を見合わせた。

「また、あたしたちのせいだ」と小春が眉を寄せてつぶやいた。

「……どうしよう」

「どうする？　長沼さんのうちへ行く？」

「うーん」と私が唸ると、

「じゃあさ、ただいま、って言おうよ。大きい声で」

「そうする？」

「うん。そうしようよ。せーの、で言うんだよ。いい？　せーの」

ただいまぁ！　小春と私は一緒に声を張り上げて言った。すると、父と母の言い合う声がぴたりと止まった。そして、微妙な間が空いた後に、おかえり、早かったわね、と不自然に明るい母の声がした。

小春が靴を脱いで、茶の間へと走っていった。私も慌てて後を追った。父と母は冷めたお茶を前にして卓袱台を囲んでいた。私はふたりの顔を交互に見やった。

母はわざとらしい取り繕った笑みを浮かべ、一方、父は露骨に不機嫌な顔をしていた。②嫌な予感がした。やっぱり、長沼さんの家に寄って、時間を潰してくるべきだったろうか。これからすぐに出かけてもいいかもしれない。ポチを散歩に連れていってあげるって約束したから、とか何とか言って。

しかしながら、隣りにいる小春のスカートの裾を引っ張って合図を送ろうとした、その瞬間に、父が妙に威厳のある声で言った。

「そこに坐りなさい。話があるから」

「あら。今、話さなくたっていいじゃないの？」と母が言った。

「今、話さなくて、いつ話すんだ？」

「だって、まだ決まったことでもないでしょう？」

「何言ってるんだ？　もう決まったことだよ」

E 案の定、父の話というのは、インド行きについてだった。エンジニアリングの会社に勤める父は、プラント建設のためインド[注3]のタミルナードゥに派遣されることになったというのだった。九月中に現地へ赴任し、滞在期間は一年の予定。あまりに突然といえば突然の人事だけれど、どうやら現地で起こった業務上の事故で負傷してしまったエンジニアが急遽帰国することになり、その代わりを父が務めることになったらしい。

「とにかく、お父さんは一足先に向こうに行ってるから」と父は言った。

「ふぅん。じゃあ、あたしたちは後から行くの？」と小春が訊ねると、

「ほんとに、ほんとに行くことになるの？」と母が不安そうな表情を浮かべて言った。「どうしても行かなくちゃいけないの？だって、事故があったんでしょう？　そんなの危ないじゃないの。あなただって怪我をするかもわかんないじゃない？」

　すると、父はうんざりしたように溜息をつき、

「さっきからもう何度も言ったように、危なくたって何だって、行って稼がなきゃしょうがないだろう」と言った。「それに、まあ俺は大丈夫だよ。怪我なんかしないさ」

③ 母はうつむいて黙りこんだ。小春と私も黙っていた。父もそれ以上、何も言おうとはしなかった。しばらくすると、母が大儀そうに卓袱台に手をついて立ち上がり、

「お腹空いたでしょ？　ゴハンの仕度をするわね」と言った。

その声は、さっきの喧嘩のときとは打って変わってひどく弱々しかったから、私は咄嗟に母の顔を見上げた。もしかしたら泣いているのではないか、と思ったのだ。でも、実際のところはどうだったのか確かめようにも、よく見えなかった。ふと気がつくと、茶の間はすっかり夕闇に包まれているのに、私たちは電気も点けずに暗がりの中で話をしていたのだった。

その晩、小春と私はめずらしく母の手伝いをしようと台所に立った。とはいえ、大したことができるわけではないから、母の指示のもと冷蔵庫から食材を出したり、茶碗や皿を出して食卓に並べたり、ごくごくささやかなことを小春とふたりで手分けしてやった。④とにかく役に立とうが立つまいが、今は母のそばにいなければ。そんな気持ちになっていたのだと思う。

「あんたたちも、たまには、女の子らしいことをしてくれるのねえ。娘を持つといいこともあるんだわ」と母は冗談めかして言って笑ったけれど、その笑顔にはぜんぜん元気がなかった。あたしたちもインドへ行くの？　いつ行くの？　私はそう訊ねたくてうずうずしていたものの、いつもとは違う母の顔つきを見るにつけ、訊くに訊けない気分にさせられた。小春も同様の気持ちでいるらしく、ときおり母のようすを窺うような視線をちらり、ちらりと投げかけていた。

しかしながら、結局のところは、私たちの方から訊ねるまでもなかったのだ。夕食の席で母が宣言したからだ。

「お父さん、やっぱり私は行けないと思うわ」

道太郎にゴハンを食べさせながら幼児語で話しかけたり、道太郎がときおり何やら声を発したりする他は、食卓は静まり返っていたから、母の発言はあまりに唐突といえば唐突だった。

「だって、道太郎はまだこんなに小さいんだもの。インドなんて行ったこともない国で育てていく自信は、私にはないわ。言葉だって不自由だし。病気にでもなったとき、どうしていいかわからなくなってしまうと思うの」

すると、⑤父は優しく諭すように言った。

「大丈夫だよ。向こうには、日本人だっているんだから。うちの会社の人間が何人も行ってるんだ。何かあったときには皆、助けてくれるさ」

「そりゃあそうかもしれないけど、こんなちっちゃい子を連れていくのは、やっぱり不安よ。何かあってから後悔したって遅いんだから。そうでしょう？　それに、もっと大きくなったらなったで、学校のことだってあるんだし。小春と日和だって、学年

の途中で転校なんて可哀想よ」
「じゃあ、やっぱり、おまえは俺にひとりで行けって言うんだな？」
母は食卓に箸を置いて、⑥＿＿＿＿うつむいた。
「……どうしても行かなくちゃならないんなら」
「行かなくちゃならないに決まってるだろ」
「そう？」
「そうさ。何だよ？　会社を辞めろって言うのか」
「そうじゃないけど」
「だったら、行くしかないだろう？　俺は家族のために働いてるんだから」
そのとき母がうつむいたまま小声で何か言ったけれど、私には聞き取れなかった。それは父も同様だったようで、え？　何だって？　と訊き返した。すると、母は泣き出しそうな、怒ったような顔を上げて、
「じゃあ、私は家族のためにここに残ります」と言った。

（野中柊『小春日和』〈集英社文庫〉より）

注1・ミーハー……軽薄な。流行に左右されやすいこと。
注2・ステージママ……子どもタレントのマネージャー役をする母親のこと。
注3・プラント……一連の工場設備や作業の総称。

問一 1 ～ 3 に入ることばの組み合わせとして適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、1すっかり　2てっきり　3ぼんやり
イ、1しっかり　2てっきり　3じっと
ウ、1すっかり　2ぐったり　3ぼんやり
エ、1しっかり　2ぐったり　3じっと

問二 〰線部A「呑気に考えるでもなく考えていた」とある。このようすを三字熟語で言い表したものとして適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、無関心
イ、有頂天（うちょうてん）
ウ、日和見（ひよりみ）
エ、能天気

問三 〰線部B・D・Fの本文における意味として適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

B「せせこましい」

ア、理想を追い求めすぎてありえない

イ、気持ちや考えにゆとりがなくつまらない

ウ、子どもたちの未来を理解することのない

エ、現実的すぎておもしろみのない

D「露骨に」

ア、感情などを隠(かく)さずありのままに

イ、不意打ちするかのように

ウ、まるで取って付けたように

エ、相手が疑いの目を向けるほどに

F「大儀そうに」

ア、いかにも落胆(らくたん)したように

イ、いかにも疲(つか)れたように

ウ、いかにも面倒(めんどう)くさそうに

エ、いかにも病を患(わずら)ったように

問四 〰線部C「せーの」とあるが、この発言をしたときの小春の心情に近いことわざとして適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、善は急げ
イ、案ずるより産むがやすし
ウ、禍を転じて福と為す
エ、清水の舞台から飛び降りる

問五 〰線部E「案の定」とあるが、この語句を正しく用いているものとして適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、自分が予想していたとおり、案の定雨が降ってきた。
イ、予定を立ててしっかり行動したことは、やはり案の定だろうか。
ウ、さまざまに悩んだ結果だが、案の定な解決策にしてみる。
エ、ようやく案の定な気分になってきたので、何か食べる気になった。

問六 ——線部①「ふたりは、おそらく、喧嘩に夢中で、私たちが帰ってきたことにも気がつかなかったのだろう」とあるが、「喧嘩に夢中」で時がたっていることを具体的に表していることばを文中から五字以内で探し、ぬき出しなさい。

問七 ——線部②「嫌な予感がした」とあるが、どのような予感か。解答用紙の「〜という予感」に続くように、文中のことばを用いて二十字以内で答えなさい。

問八 ――線部③「母はうつむいて黙りこんだ」とあるが、このときの母のようすとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1、父のあまりに非常識な発言に、あきれて何も言えないでいる。
2、父に言うことを聞いてもらえず、あせっていてことばにつまっている。
3、父の判断に対して賛成できずに、気がかりでことばが出ないでいる。
4、父に言いくるめられ、情けなくて何も話せなくなっている。

問九 ――線部④「とにかく役に立とうが立つまいが、今は母のそばにいなければ。そんな気持ちになっていた」とあるが、それはなぜか。その理由を文中から三十五字以内でさがし、初めと終わりの五字をぬき出しなさい。

問十 ――線部⑤「父は優しく諭すように言った」とあるが、このときの父のようすとして適切でないものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1、母が弱音をはいたので気遣(きづか)っている。
2、母に強く言えなくて尻込(しりご)みしている。
3、母をなだめて言いくるめようとしている。
4、母に落ち着いて考え直してもらおうとしている。

問十一 ――線部⑥「うつむいた」とあるが、この時の母のようすとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1、子どもたちと一緒に暮らすために、経済力を持とうと前向きになっている。
2、父親が意見を変えないことにうんざりし、気を悪くしている。
3、自分の主張を通そうと、子どもたちをだしにして弱気なふりをしている。
4、息子や娘のことを最優先にするという、自分の気持ちを言おうと決意している。

問十二 母の人物像として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1、自分の考えが正しいことに自信を持っていて、自己主張を曲げない頑固（がんこ）な人物。
2、子どもの生活を守るためには、どうすればよいかを考えることのできる芯（しん）の強い人物。
3、理不尽（りふじん）なことがあっても子どものためを思い、言いたいことを言わずに耐（た）えるがまん強い人物。
4、弱い人を思いやり、奉仕（ほうし）の精神を持って人の和を作ろうとする愛情の深い人物。

【三】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

1　どうして言葉は新たな意味を無限に作り出せるのか

新たな意味の産出可能性という問題

私たちは新しい言葉を作り、それを読んだり聞いたりします。新語を作ったり新しい比喩を作ったりもしますが、もっと地味な新しさに溢れています。例えば、まさに私はいま新しい言葉を書き出していますし、あなたも生まれて初めて読む言葉と出会っているわけです。「電車の遅延で会議に遅刻します」なんて文にはなんの目新しさもありませんが、それでもこれは私にとって生まれて初めて書いた、「新しい」文です。そしてこのような新しさは、新しいと意識されないほど抵抗なく、すらすらと理解できるでしょう。でも、なぜでしょうか。①

例えば「猫が富士山に登った」という文を考えてみましょう。こんなありそうにない文でも、その意味するところはたちどころに理解できます。言葉は新たな意味を次々と生み出し、私たちはそれをやすやすと理解する。どうしてそんなことができるのか。さらに言えば、文の長さに上限はありませんから、新たに生み出される意味は無限に可能です。だけど、人間には無限の文を記憶するような能力はありません。私の記憶力なんて、そりゃあ貧弱なものです。でも、そんな私にでも、新たな意味をもった文を際限なく作り続けることができます。どうしてそんなことができるのでしょうか。A

この問題を「新たな意味の産出可能性の問題」と呼びましょう。ごたいそうな名前で恐縮ですが、こうして名前をつけておいた方が話がしやすいのです。とはいえ、この問題に答えるのはそんなに難しくないように思えるかもしれません。よかったら少し考えてみてください。

新たな意味の産出可能性の問題　新たな意味をもった文を無限に作ることができ、容易に理解することができるのはなぜか。

どう考えていいか分からないという人もいるでしょうね。ひとつのアドバイスは、具体的に考えてみる、というものです。例えば、「猫が富士山に登った」という文を考えてみましょう。生まれて初めてこの文を読んだときに、B荒唐無稽な文だとは思ったかもしれませんが、意味はすぐに分かった。なぜだと思います？

やっぱり、少し考えてほしいな。

さて、どうでしょう。「猫が富士山に登った」、まあ、全部知ってる単語だからね。そうそう、そんな感じです。――「猫」という語は知っている。「富士山」も分かる。「登った」ということも分かる。それらはすべて既知の語です。そこに新しさはありません。文全体は「……が～した」という型で、このような文型も目新しくはC ない。語の組み合わせ方は文法の知識です。例えば、「キョン」という語を知らない人は、「キョンが富士山に登った」という文を読んでも意味が分かりません。（キョンというのは鹿の一種で、動物園などから逃げ出したキョンが、房総半島や伊豆大島で野生化しているらしいです。）さらには、「キョンがガレ場をトラバースした」だと、もう日本語に思えないという人もいそうです。それに対して、「猫が富士山に登った」は既知の語を既知の文法に従って作った文だから、初めて読んでも意味が分かる。こうして、新たな意味の産出可能性の問題に対するひとつの自然な答えが見えてきます。

言語は有限の語彙と文法からなる

語彙の知識も文法の知識も有限です。

1　でも、日本語が適切に使えているのであれば、たとえ表立って文法を言えないとしても、文法の知識はもっていると言ってよいでしょう。

2　「ふつうの日本人」ってのもよく分かりませんが、有限であることは確かです。

3　そして文法の知識も、有限の範囲に収まります。

4　インターネットの情報によると、ふつうの日本人の知っている語彙数は三万から五万だそうです。

5　文法の知識については微妙で、ふつうの日本人が日本語の文法をきちんと答えられるかというと、私などは動詞の活用もちゃんと言えません。

あとは、文法に従って語彙を組み合わせれば、文の長さに上限はありませんから、いくらでも長い文が作れる。かくして、初めて出会う文が無数にできるというわけです。これが、有限の記憶容量しかもたない人間が、無限に新たな意味を作り出せる仕掛けではないでしょうか。

新たな意味をもった文を無限に作ることができ、容易に理解することができるのはなぜか。――言語は有限の語彙と文法よりなるからだ。

新たな意味の産出可能性の問題に対する答えは、とりあえずこれでよさそうです。［1］、この正しいと思われる一歩――いや、こういう言い方をすると「だけどほんとは正しくない」と続くんじゃないかと身構えられそうですが、いま踏み出したこの一歩に関しては正しいと私も思っています。でも――、この答えはごく自然にこう考えるよう私たちを誘うでしょう。文の意味を理解する前に、まず語の意味を理解しているのでなければならない。「猫が富士山に登った」という文を理解する前に、「猫」、「富士山」、「登った」という語の意味を知っていなければだめだ、というわけです。これも、当然のことと思えます。だけど、このあたりから、実は怪しくなってきているのです。文の意味の理解は語の意味の理解から成り立っている。それゆえ、まず語の意味を文の意味に先立って理解していなければならない。では、語の意味とは何か。それを文の意味について論じる前に考えておかなくちゃいけない。②この当然とも思える考え方をひっくり返したのが、[注1]フレーゲなのです。

だけど、ひっくり返すといってもどういうことなのか。語の意味も分からないのに文の意味が分かるはずもないでしょう。文の意味を理解する前に語の意味を理解しておかなければいけないというのは、あたりまえのことじゃないですか。

いや、哲学はしばしば、あたりまえがあたりまえじゃなくなったところから始まります。そして私たちはまさに③そこにいるのです。「猫」の意味も「富士山」の意味も、私たちはよく分かっている。［2］、「猫が富士山に登った」なんて文も理解できる。では、「猫」の意味は何でしょうか。こんなふうに問いを立てると、むしろ逆に尋ね返されそうです。「猫」の意味なんてもうよく分かっている。なのに、「「猫」の意味は何か」なんて、どうして問わなくちゃいけないのか？

哲学の面白さのひとつは、ひとが立ち止まらないところで立ち止まり、分かっていたつもりのことが分からなくなって、そこに思ってもみなかった問題が開けることにあります。それこそが④哲学の最大の面白さだと言ってもよいでしょう。だから、しばらくこの問題につきあってみてください。「猫」の意味、それは何でしょうか。

2 「猫」の意味は何か

「富士山」と「猫」

「富士山」の意味は何かと尋ねられて、「静岡県と山梨県にまたがる日本一高い山のことだ」と答えたとしましょう。この答え方だと、少なくとも「静岡県」、「山梨県」、「日本」、「山」といった語の意味を理解している必要があります。語の意味を言葉で説明すると、こんどはその説明に使われている語の意味を説明しなければなりません。「猫」なんかだと言葉で説明するのも至難の業（わざ）です。［　3　］、「体はしなやかで、鞘（さや）に引きこむことのできる爪（つめ）、ざらざらした舌、鋭（するど）い感覚のひげ、足裏の肉球などが特徴（とくちょう）」（『広辞苑（こうじえん）』第七版）なんて説明しても、「「鞘」ってなに？」、「「肉球」ってなに？」と、意味を説明しなければならない語の数が増えただけという感じです。もちろん、【　a　】の語の意味を既知の語を使って説明してもらうということは、あるでしょう。しかし、説明に使われている語の意味が再び問題になる以上、「そもそも語の意味とは何なのか」という哲学的問いに対する答えにはなっていません。

だとすれば、「富士山」の場合、現物を【　b　】することになるでしょう。［　4　］、実物や映像を見せながら「富士山」と呼ばれるものを実際に指し示して、「これが「富士山」だ」と教えるわけです。E実はこの場面でも考えなければいけない哲学的問題が発生するのですが、いまはこのやり方を受け入れておきましょう。「富士山」はある【　c　】の名前である、そう考えておきます。ここで問題にしたいことはこの先にあります。

じゃあ、「猫」の意味は何なのか。

「「猫」って、どういう意味？」と子どもに尋ねられたら、どう答えます？　その子は［　⑤　］。だ

から「「猫」は“cat”だよ」なんて答えることはできない。「「猫」の意味は何か」というのは実は難しい問題なのですが、でも、その難しさを実感してもらうためにも、少し考えてみてください。

（野矢茂樹『言語哲学がはじまる』〈岩波新書〉より）

注1・フレーゲ……ドイツの数学者・哲学者。

問一 1 ～ 4 に入ることばとして適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。（ただし、同じものは使えない。）

ア、つまり　イ、だから　ウ、なぜなら　エ、例えば　オ、でも

問二 〰線部A・Bの本文における意味として適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

A「たちどころに」

ア、半分くらい
イ、目が覚めるほど
ウ、待つ間もなく
エ、自分なりに

B「荒唐無稽な」

ア、でたらめな

イ、おおざっぱな

ウ、かんたんな

エ、おおげさな

問三 〰線部C・Dと同じ用法のものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

C「ない」

ア、この部屋には窓がない。

イ、人の名前を覚えられない。

ウ、交通量が少ない道路。

エ、彼とはあまり親しくない。

D「の」

ア、君は自転車に乗れるの。

イ、兄は走るのをいやがった。

ウ、母の作ったお弁当はおいしい。

エ、私の本を貸してあげる。

問四 【 a 】～【 c 】に入る二字のことばを次の漢字を組み合わせてそれぞれ作りなさい。

象　示　知　来　提　対　供　開　徴　照　未　出

問五 〜〜線部E「実は」がかかることばとして適切なものを後の文から一つ選び、記号で答えなさい。

E〜〜実はこの場面でも ア＿＿＿＿ 考えなければ イ＿＿＿＿ いけない哲学的問題が ウ＿＿＿＿ 発生するのですが、いまはこのやり方を エ＿＿＿＿ 受け入れて オ＿＿＿＿ おきましょう。

問六 本文には次の一文がぬけている。どこに入れたらよいか、この直前の〜〜五字をぬき出しなさい。

逆に、知らない語が文中にあると、理解できなくなります。

問七 ——線部①「このような新しさは、新しいと意識されないほど抵抗なく、すらすらと理解できるでしょう」とあるが、それはなぜか。その理由をこれよりあとの文中から十七字でさがし、初めと終わりの五字をぬき出しなさい。

問八 ……線で囲まれた部分の1〜5を正しい順序に並べかえ、番号で答えなさい。

問九 ——線部②「この当然とも思える考え方」とあるが、これはどういうことか。端的（たんてき）に述べている部分を文中から三十字でさがし、初めと終わりの五字をぬき出しなさい。ただし句読点は含まない。

問十 ——線部③「そこ」とあるが、この指示語が指す部分をぬき出しなさい。

問十一　――線部④「哲学の最大の面白さ」とあるが、その説明として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1、あえて当然だと思われていたことを疑ってみることで、予想外の新鮮な考えを展開していけること。
2、文法に従って語彙を組み合わせれば、文章が作れるという考えが当然ではなく、間違いになること。
3、前後の文から、語の意味を理解するという当然のことを、フレーゲのように指摘できるようになること。
4、当然のことを考え直すことで新たに他者からの質問を導き出し、よりよい解決策を見つけること。

問十二　［　⑤　］に入ることばを、「日本語」という言葉を用いて、十五字以内で答えなさい。

国語 解答用紙

受験番号

氏　名

得　点

【一】

問一 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥

問二

問三

問四 耕 読 画

問五

【二】

問一

問二

問三 B D E

問四

問五

問六

問七 という予感。

問八

問九

問十

問十一

問十二

【三】

問一 1 2 3 4

問二 A B

問三 C D

問四 a b c

問五

問六

問七

問八

問九

問十

問十一

問十二

国語2月1日(午後)